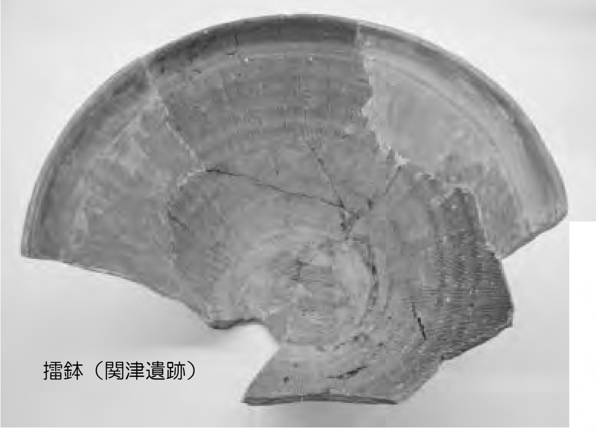
整理室公開事業・埋蔵文化財整理調査成果報告会

あの遺跡は今！

PART 20

『古代のくらし』


擂鉢（関津遺跡）

小型円板（狛氏館遺跡）

墨書土器（上御殿遺跡）

★博物館展示室の入館についてのご案内★
本日は「ふれあいサンデー」につき県内在住者とそのご家族は無料です。
県外在住の方は、この資料を博物館チケット売場でご提示いただきますと、団体料金でご観覧いただけます。【2015.2.15のみ】

平成27年2月15日(日)

公益財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県立安土城考古博物館
滋賀県教育委員会

整理調査成果報告会について

公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、県内各地の埋蔵文化財の発掘・整理調査を行っています。発掘調査で得られた情報は、「現地説明会」や「新聞やテレビの報道」などを通じていち早く公表しています。また、滋賀県立安土城考古博物館内にある調査整理課では、整理調査の成果についてより深くご理解いただけるように、整理調査報告会「あの遺跡は今！」を平成17年度から毎年２回実施しています。「あの遺跡は今！」では、新たな資料や成果を積極的に公開・展示するとともに、出土品に直接触れていただく整理作業体験などを行っています。

今回は、メインテーマを『古代のくらし』とし、発掘調査で出土した資料を通じて、当時の人々の生活や技術をすこしでもお伝えすることができればと思い、出土遺物の展示と関連遺跡の調査報告会を企画いたしました。

この企画が、滋賀の歴史を体感し、文化財への興味と親しみをお持ちいただくきっかけになればさいわいです。

目 次

◇ごあいさつ／目次

◇関連年表(1)

◇展示解説「繊細優美な縄文人―縄文時代の漆塗り櫛」金森西遺跡(2)

◇展示解説「土錘―土で作られた魚取りの道具―」太子遺跡(3)

・◇展示解説「鎌倉時代の‘うつわ’あれこれ」大石城遺跡(4)

◇展示解説「何処から入手したのか?!―石臼と石斧―」松原内湖遺跡(5)

・◇展示解説「残された文字―文字資料を探る―」塩津港遺跡(6)

◇展示解説「石仏―死者追善の記念物―」安養寺遺跡(7)

・◇成果報告・展示解説「擂る・呑む・愛でる―中世の生活の道具―」関津遺跡(8～9)

◇成果報告・展示解説「‘筆跡鑑定’致しましょう―個性あふれる出土資料―」上御殿遺跡(10～11)

◇成果報告・展示解説「謎の‘円板’!?小型円板―陶磁器の欠片を再利用!?―」狛氏館遺跡(12)

・◇展示解説　「古代主要道周辺の集落!?」弘部野南海道遺跡(13)

★見どころ紹介『調査員の‘気になるモノ!?’報告会』★

報告予定遺跡：上御殿遺跡・関津遺跡・狛氏館遺跡

時間：①午前11時00分～12時00分　②午後3時00分～4時00分

場所：整理室

関連年表

時代 / 主な出来事 / 今回取り扱う遺跡とその時期

土器の発明

相谷熊原遺跡にムラ？ができる

粟津湖底遺跡で人々が暮らしを営み始める

石山貝塚が営まれる

今から約 2500 年前 稲作始まる

248 年頃 卑弥呼死す

…前方後円墳が各地にさかんに築造される

…群集墳が盛行する

604 年 憲法十七条の制定

645 年 大化の改新（乙巳の変）

667 年 近江大津宮に遷都

710 年 平城京に遷都

742 年 紫香楽宮を造る

794 年 平安京に遷都

805 年 最澄帰朝し、天台宗を伝える

11 世紀初め 紫式部「源氏物語」完成

1167 年 平清盛、太政大臣となる

1192 年 源頼朝が征夷大将軍となる

1338 年 足利尊氏が征夷大将軍となり、室町幕府を開く

1467 ～ 77 年 応仁・文明の大乱

1573 年 足利義昭追放（室町幕府滅亡）

1576 年 織田信長、安土城に入る

1603 年 徳川家康、将軍となり、江戸幕府を開く

1868 年 明治維新

1998 年第 18 回冬期オリンピック、長野で開催

時代：旧石器、縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、戦国、安土桃山、江戸、明治、大正、昭和、平成

年代：B.C.11000、B.C.10000、B.C.9000、B.C.8000、B.C.7000、B.C.6000、B.C.5000、B.C.4000、B.C.3000、B.C.2000、B.C.1000、1、1000、2000

年代（拡大）：200、300、400、500、600、700、800、900、1000、1100、1200、1300、1400、1500、1600、1700、1800、1900、2000

遺跡：松原内湖遺跡、金森西遺跡、上御殿遺跡、松原内湖遺跡、弘部野南海道遺跡、安養寺遺跡、狛氏館遺跡、太子遺跡、狛氏館遺跡、塩津港遺跡、大石城遺跡、松原内湖遺跡、関津遺跡、安養寺遺跡

繊細優美な縄文人
―縄文時代の漆塗り櫛(くし)―

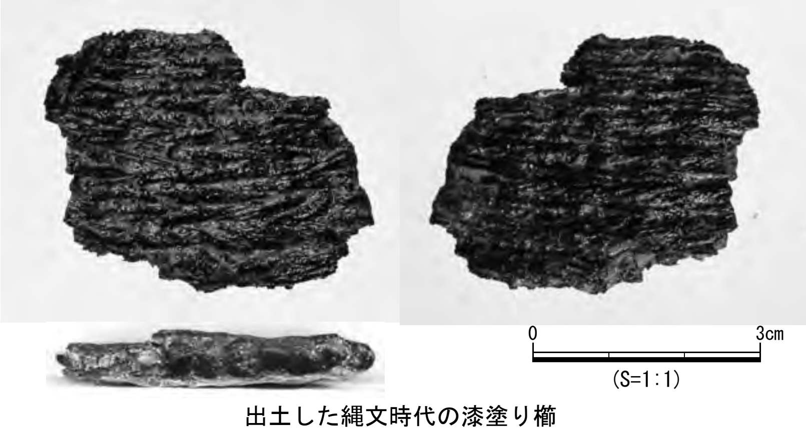
金森西遺跡(かねがもりにし)（守山市金森町）

金森西遺跡の発掘調査では、古墳時代前期（約 1,700 年前）を中心とする集落跡が見つかり、玉作りを行っていたことで注目されました。さらに、古墳時代の生活面の下層より、縄文時代後期（約 3,500 年前）の土器や石器などが出土しています。

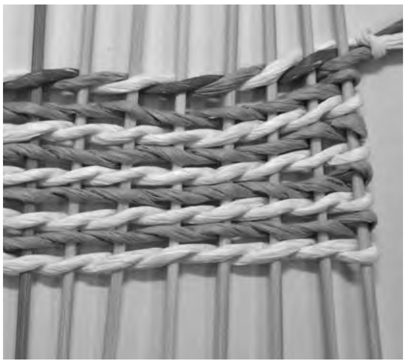
出土した縄文土器

出土した縄文時代後期の遺物で特筆されるものに、紐状の繊維を編み込んで漆塗りした「櫛(くし)」があります。非常に脆弱な遺物です。発掘調査時は漆塗りの編み物の破片と考えていましたが、保存処理の過程で土を丁寧に落としたところ、歯が抜け落ちている穴があることから「櫛」であることがわかりました。

この櫛は、現在の櫛のように髪をとかすためものではなく、かんざしのように「髪飾り」として使われていたと考えられています。歯の部分は残っていませんが、頭の部分は撚られた２本の紐を一組として、矢羽状（八筈巻(やはずまき)）に編み込んで歯の部分を固定し、横の端までくると折り返して上段を編み込みます。さらに頭の縁の部分は３本の紐で編み込んで仕上げています（三本もじり）。また、表面は黒漆(くろうるし)とともに水銀朱(すいぎんしゅ)をまぶして塗り固められ、黒と朱の鮮やかなコントラストが丁寧に編み込まれた矢羽状の紐の美しさと相まって、優美な装いを際立たせています。縄文人の繊細で高い技術と、優美な美的センスを示している貴重な資料といえます。



出土した縄文時代の漆塗り櫛



編み方模式復元

土　錘

―土で作られた魚取りの道具―

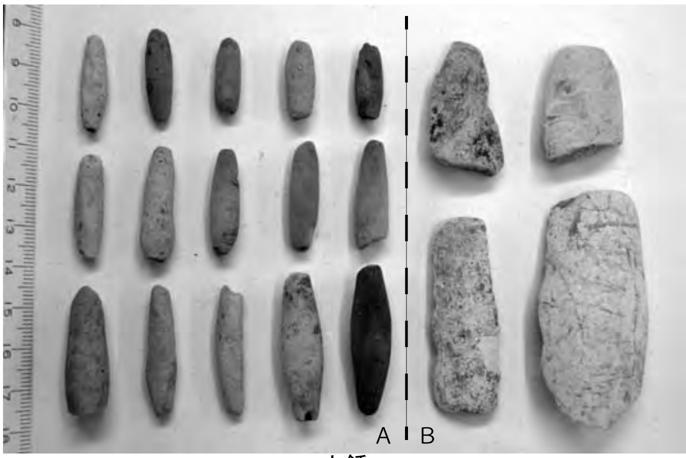
太子（たいし）遺跡（大津市太子町）

平成 25 年度に実施した太子遺跡の発掘調査では、古代から中世ごろの建物跡や、中近世以降の川の跡など様々な遺構と、土器や土製品、石器、鉄製品、木製品などの遺物が見つかりました。その中に、「土錘（どすい）」があります。調査地全体で 30 点ほど見つかっています。

この土錘、出土状況は良好ではなく、まとまって見つかったものはありませんでした。いずれも「管状土錘（かんじょうどすい）」と呼ばれるもので、魚取り用の網に取り付けて使ったおもりの一種だと考えられています。使用された時代は、一般的には、管状の土錘が用いられるようになるのは、弥生～古墳時代以降になってからだと考えられています。

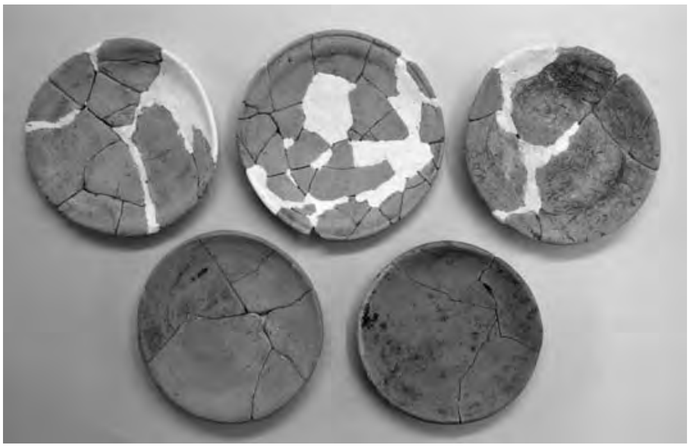
さて、この太子遺跡で見つかった管状土錘は、一見すると大小二つのグループに分けられます。写真左側の小さく細長いグループ（以下Ａグループ）と、右側の太く大きいグループ（以下Ｂグループ）という 2 種類です（右写真）。Ｂグループの土錘は、今回の調査で見つかったものすべてが、破片資料つまり割れた状態のものでした。

これまでの研究から、これらの土錘のうち、Ａグループは帯のように張り巡らせた網に魚をからませて捕る刺し網漁に用いられ、Ｂグループは水中で網をひく曳き網漁などに用いられたとみられています。また、遺物包含層からは、平安時代の土師器（はじき）皿も見つかっており、土錘も同じ頃のものと考えられます。

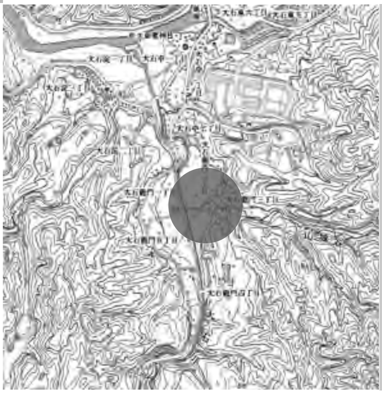


土錘

隣接する関津遺跡の過去の調査成果では、今回の調査地の南東側に 12 ～ 13 世紀頃の沼沢地が広がっていた可能性が指摘されています。今回見つかった土錘は、その沼沢地か、あるいは調査区の西側を流れる瀬田川などで使われたものなのかもしれません。



土師皿



鎌倉時代の‘うつわ’あれこれ

大石城（おおいしじょう）遺跡（大津市大石龍門）

大石城遺跡は、大津市南端部の大石龍門２丁目に位置し、大石川が瀬田川に合流する少し南側にあります。この周辺には、鎌倉時代に「大石庄」や「龍門庄」などが存在したと佐久奈度神社文書や禅定寺文書にも記されています。

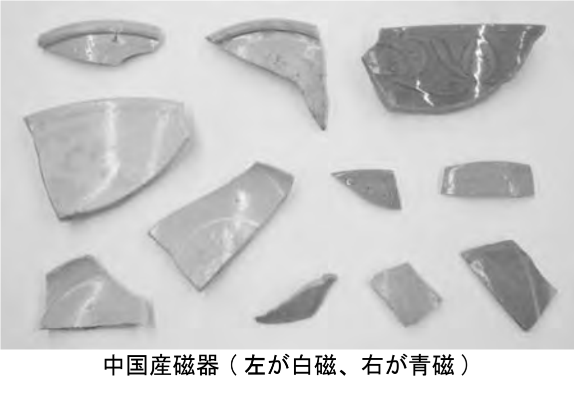
今回紹介するのは、土師器皿です。土師器皿は、直径８～15㎝の素焼きの土器で、主に儀式などに使用される１回きりの清浄な器として用いられました。大石城遺跡から出土した土師器皿の時期は鎌倉時代頃と考えられ、おおむね直径９㎝前後と12～13㎝のものです。皿の中には、縁に油煙状の物質が付着したものがあり、これらの用途は灯明皿と考えられるので、夜に灯りをともしていたと推測できます。

土師器皿と石鍋（右上が石鍋）

ほかには、瓦器椀があります。出土した瓦器椀は奈良から運ばれたもので、古代から利用された「田原道」を通って運ばれてきた遺物だと言えます。

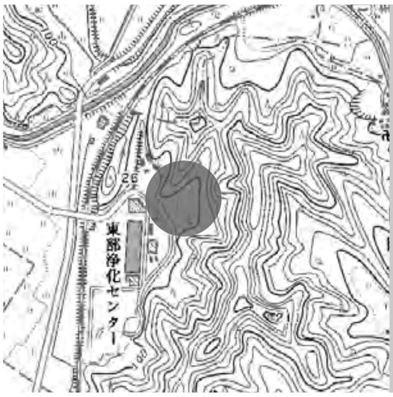
瓦器椀と瓦器皿（手前の３枚が皿）

そのほかには、青磁や白磁もあります。これらは中国から輸入されたもので、庶民には手に入れることが出来ない高級品です。大石城では出土していませんが、割れ目を漆で継いで補修したりしているものもあり、使えなくなるまで大切に使われていたのでしょう。



中国産磁器（左が白磁、右が青磁）

今回の発掘調査では、大石城に直接かかわる遺構は見つかりませんでした。しかし、青磁や白磁など庶民から縁遠い遺物が出土したことから、大石氏と関係のある人々がこの場所で生活していたと推測できそうです。

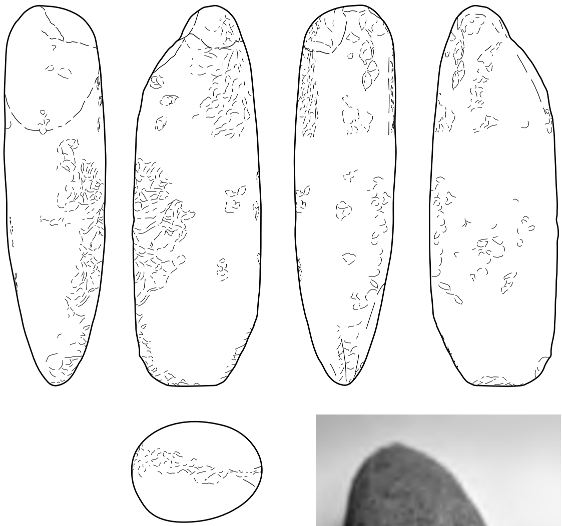


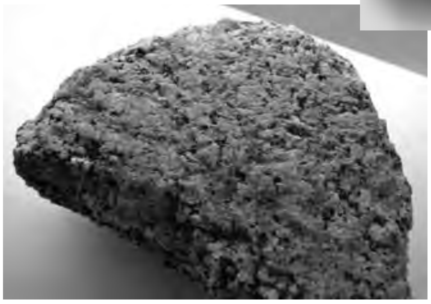
何処から入手したのか？！

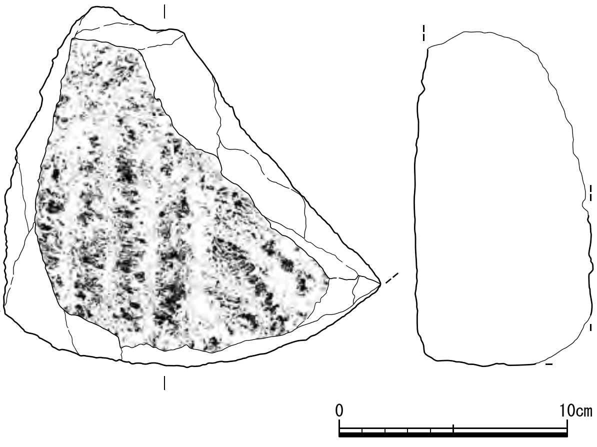
―石臼と石斧―

まつ ばら ないこ

松原内湖遺跡（彦根市松原町）







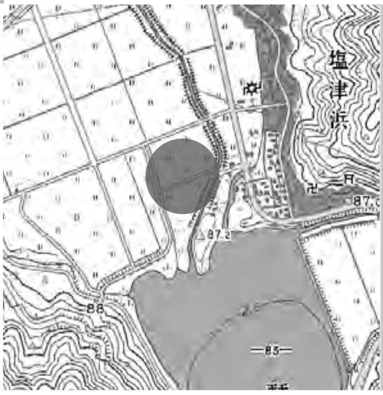
出土した石製品（上：磨製石斧未製品　下：石臼）

松原内湖遺跡では、これまでの発掘調査で、縄文時代から近世にいたる様々な時代の遺物・遺構が見つかっています。

今回ご紹介するのは、平成 24 年度の発掘調査で見つかった、石製品 2 点です。

１点目は、弥生時代頃の磨製石斧の未製品（＝作りかけ）と考えられる石製品です。全体を敲いて磨製石斧の形状に仕上げつつも、肝心の「刃」の部分には研磨が施されていないように見えます。表面の磨滅が著しく、研磨面が剥がれてしまった可能性もありますが、現時点では未製品と考えています。この資料は、科学分析の結果、緑色岩という石材を用いて作られていることが分かりました。実はこの緑色岩は、滋賀県内では今のところ産出地は確認されていません。つまり県外から運ばれてきた可能性が極めて高い資料なのです。

2 点目は石臼です。大豆などを挽くのに使う道具です。この石臼は、黒雲母花崗岩という石材を用いて作られていました。この石材は、滋賀県内では伊吹の曲谷（まがたに）というところで産出することが知られています。松原内湖からは直線距離でも 25 ㎞前後離れています。松原内湖まで運ぶのも、一苦労だったことでしょう。



残された文字

―文字資料を探る―

塩津港遺跡（しおつこう）（長浜市西浅井町塩津浜）

塩津港遺跡は平安時代後半の神社と港を中心とする遺跡です。これまでに神像のほか、檜皮（ひわだ）や瓦などの建築部材、幣串（へいぐし）・しめ縄・灯明などの祭礼具、飾り金具、土師器皿、起請文札（きしょうもんふだ）、荷札木簡など、多くの貴重な遺物がみつかっています。

今回はこれらに残された文字の様子について、ご紹介します。確認できる文字は土師器皿や木簡に墨で書かれており、肉眼ですぐ墨書が確認できるもののほかに、墨はほとんど残っていないものの文字の部分が周囲の風化によって浮き上がっているものがあります。これは文字が記されてから、日当たりが良くあまり雨の当たらないところに、長く置かれていたと考えられます。

残された文字の内容を探るために、ルーペ、赤外線カメラなどを駆使するのですが、明瞭に見えるものはごくわずかです。ところが、墨痕の調査に非常に効果を発揮する方法があります。光を斜め上から当てる（斜光）ことで文字を浮かび上がらせる方法で、まるで”あぶり出し”のようです。

当時の暮らしを知ることのできる重要な文字資料です。出土資料に残された文字を書いた人達は、数百年も後に自分の書いた文字が残っているとは、想像していなかったかもしれませんね。

（通常光写真）
見えにくい文字に、斜めから光を当てると･･･

→

（斜光写真）
驚きの世界が！

石　仏

―死者追善の記念物―

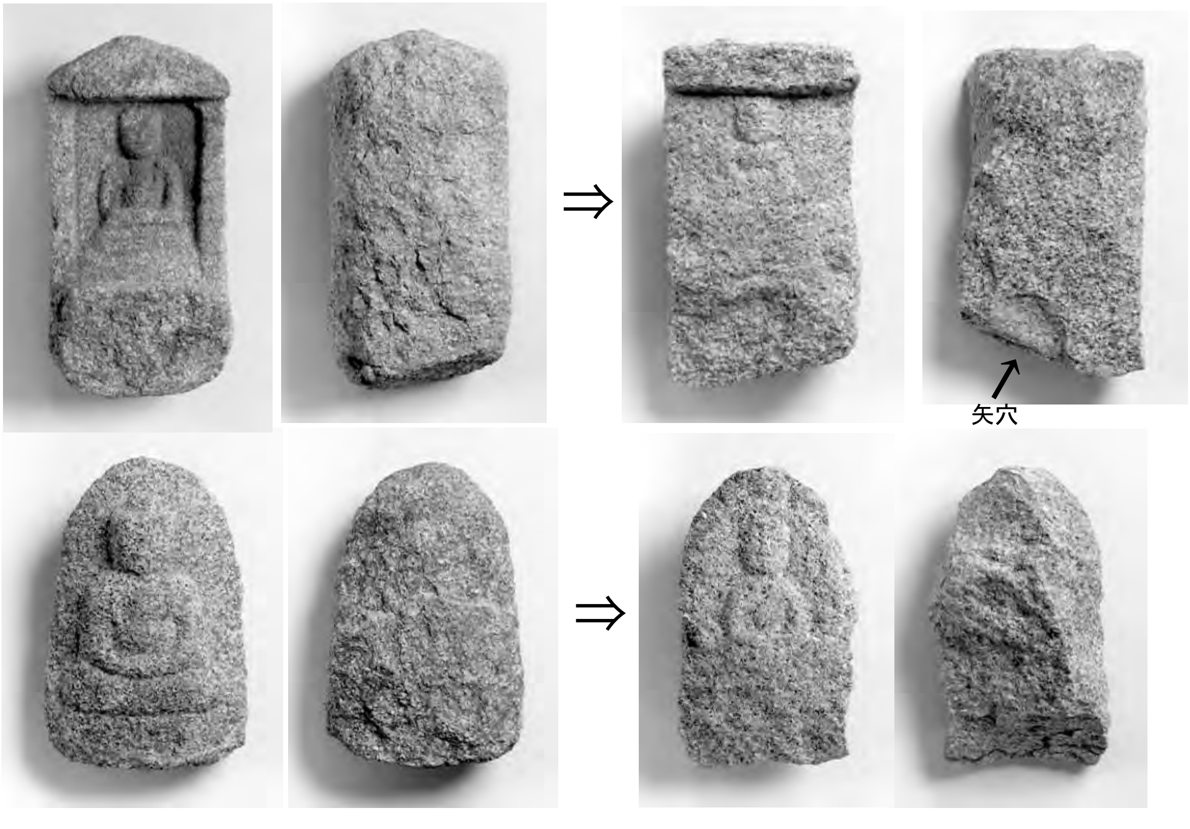
安養寺（あんようじ）遺跡（近江八幡市安養寺町）

安養寺遺跡は古代寺院跡として知られ、発掘調査では７～８世紀の古瓦がたくさん出土していますが、ほかに中世の遺物も出土しました。

今回、ご紹介するのは、室町時代の石仏です。石仏は一般に「お地蔵さん」と呼ばれることが多いのですが、じつは多くが西方極楽浄土の教主である「阿弥陀仏」を彫刻したもので､亡くなった人の追善供養のためにつくられました。近江地域では、室町時代に膨大な数の石仏がつくられ、お寺の境内や町中のお堂、道ばたなどいたるところで、そのお姿を目にすることができます。

安養寺遺跡の石仏は16世紀の製作とみられますが、つくり方をよく見ると製作年代の新古がうかがえます。下の写真の左側のものは、ていねいに仏の像や屋根・柱が表現されています。一方、右側のものは、像や屋根のつくりが粗く柱は省略されています。裏面の仕上げを見ても、左側はていねいに削っていますが、右側は矢穴をのこしており原石を割り取ったままの状態です。つまり、左側が古く、右側が新しい様相を示すと考えられます。

（古）　　　　　　　　（新）



安養寺遺跡から出土した石仏

擂（す）る・呑（の）む・愛（め）でる

—中世の生活の道具—

関津（せきのつ）遺跡（大津市関津）

関津遺跡は、鎌倉時代の簗（やな）跡と室町（戦国）時代の溝で方形に区画された居住域が確認された遺跡です。当地の南の尾根上には、鎌倉時代にこの地に勢力を構えた宇野氏が関津城を築いており、この居住域には宇野氏の一族や被官が暮らしていたと考えられます。

溝で区切られた区画内 (中央に井戸が見えます)

関津遺跡の区画内には、建物跡などは後世に削られて確認できませんでしたが、井戸や溝に降りたと考えられる石の階段などが残されていました。井戸や溝からは、当時の人たちの暮らしが窺えるようなたくさんの遺物が見つかっています。

中世の擂鉢 (左上から順番に溝が多くなってきます)

近世の擂鉢 (溝がたくさんつけられています)

今回は、区画内で使用されていたと考えられる土器や陶磁器を紹介します。

まず初めは、擂鉢（すりばち）です。擂鉢は、上方に広がる逆台形をした容器で、食物を擂るための道具です。器の内面には擂目と呼ばれる細かな溝が多数つけられ、この溝で食物を擂り潰していました。擂鉢は鎌倉時代中葉から後半（13 世紀末～ 14 世紀初頭頃）に備前地方で初めて焼かれたようで、信楽では 15 世紀初め頃に出現しています。それまでは、擂目のない捏鉢が生産されいました。鎌倉時代には、食物を「捏ねる」から「擂る」に変化したことが窺えます。また、擂鉢の登場で粒味噌が擂られ、水に溶けやすくなったことによって、味噌汁が生まれました。

天目茶碗 (中国製の陶器を模倣したもの)

水指（茶碗などをすすぐための水を入れる容器）

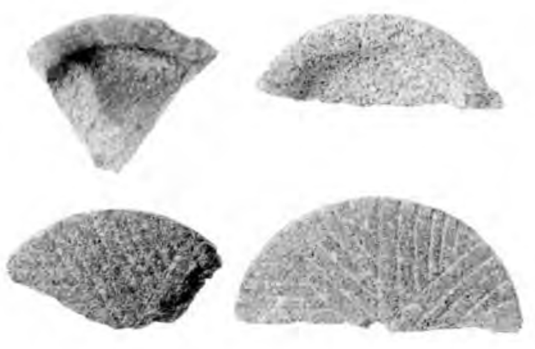
次は茶道具です。茶の湯は室町時代の大名や豪商などの間で流行しました。彼らは、中国から輸入された「唐物（からもの）」と呼ばれる豪華な茶器を争って収集し、それを使って盛大な茶会を催していました。それに対して、村田珠光（むらたじゅこう）が始めた「わび茶」は、千利休によって完成されました。贅沢を禁じ質素を旨とする茶会のあり方は、日常品を茶道具に取り入れた器にも現れました。しかし、当時の茶の湯はまだまだ上流階級の文化でした。

今回の調査では、信楽の水指や中国産を模した瀬戸美濃産の天目茶碗、土師質や瓦質の風炉など、当時の茶道具と考えられる器は破片も含めてたくさん出土しました。また、中国産の青磁や白磁などの中にも、「唐物」の茶器として珍重された器があったのかも知れません。

輸入陶磁器 (小さな破片で見つかりました)

最後は輸入陶磁器です。中国や朝鮮からもたらされた、当時としては非常に貴重なものです。青磁、白磁、染付 (青花) など、堅く色や模様が美しく光り輝いた陶磁器です。このような貴重な器は、たいへん高価なものなので、欠けても継いで使用していたと考えられ、関津遺跡からはどれも小さな破片で出土しています。

今回紹介した土器は、ちょっとリッチな人たちの生活を垣間見せてくれるのです。



石臼 (穀物を挽いて細かい粉にしました)

「筆跡鑑定」致しましょう
―個性あふれる出土資料―

上御殿(かみごてん)遺跡（高島市安曇川町三尾里）

◇現地の様子

上御殿遺跡では、平成 20 年度から平成 26 年 12 月末にかけて、河川改修に伴う発掘調査を行いました。

これまでの調査では、縄文時代から室町時代にかけての遺跡であることが明らかとなり、古墳時代から平安時代の建物や弥生時代から古墳時代の墓、古墳時代から室町時代の川などの遺構が数多く見つかりました。

これらの遺構の分布から、平安時代までは川がいくつも流れる間に建物や墓などが立地しており、現在よりも起伏のある地形であったことがわかりました。その後、川が徐々に埋まったり埋められたりして、次第に現在のような平坦な地形になっていったと考えられます。

これらの遺構から、土器や木器、石器などの遺物が出土しています。国内初の出土事例となった弥生時代中期～古墳時代前期の双環柄頭短剣の鋳型（約 2350 ～ 1700 年前）や、県内最多の出土点数となった奈良時代～平安時代の木製祭祀具（約 1300 ～ 900 年前）などは、注目される遺物です。

短剣の鋳型

人形（ひとがた）

◇”筆跡鑑定”致しましょう～個性あふれる?! 出土資料～

多様な出土資料には墨書の確認できるものがあり、そこから人々の暮らしがうかがえます。今回は墨書資料の”筆跡”について、詳しくみてみたいと思います。

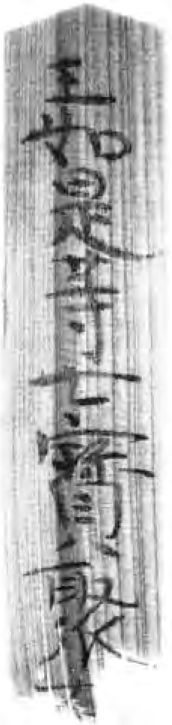
写真（左）の墨書土器には、人物名とみられる「守君舩人」の墨書があります。小型の甕の表面に、「守君舩人」が６か所、「守舩人」が１か所の、７列にわたってほぼ均等に配されており、水辺の祭祀に用いられたものです。詳しくみると、それぞれの文字は、止め、払い、くずし方などが異なっており、別々の人物によって書かれた可能性が浮かび上がってきます。７人で囲むようにして文字を書いたのでしょうか。あるいは、同一人物が意図的に書き方を変えたのかもしれません。何のために書かれたのか、どういう意味があるのか･･･まだまだ不明な点も多いのですが、文字をじっくり観察することで、祭礼の一端が断片的にみえてきそうです。

写真（右①）は、薄い板に描いたお経（柿経（こけらきょう））です。右に左にずれながらも、楷書で一字ずつ丁寧に書かれており、まじめで律儀な人柄がうかがえます。写真（右②）はまた違った筆致です。

出土資料は内容ばかりに目がいきがちですが､ひとつひとつをじっくり観察すると､個性豊かな筆致が見えてきます。大きな歴史の中に垣間見える人々の暮らし、個々人の息づかいが感じ取れる文字資料です。

墨書土器

①



②

柿経

謎の‘円板’⁉小型円板

―陶磁器の欠片を再利用！？―

狛氏館遺跡（東近江市三津屋町）

平成 23 ～ 25 年度に実施した狛氏館遺跡の発掘調査では、井戸跡や溝跡など、調査地周辺が耕作地として開発・利用されてきたことを物語る遺構とともに、縄文時代～弥生時代ごろの石器や、古代～中・近世ごろの陶磁器片などが出土しています。

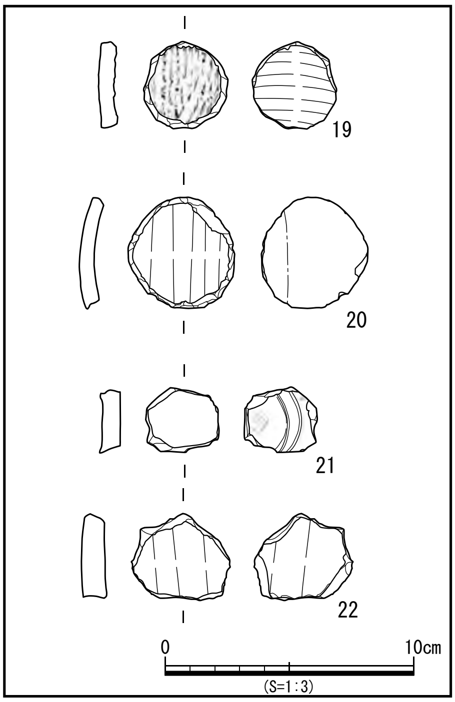
今回紹介するのは、「小型円板」と呼ばれる資料です。調査で見つかった小型円板は４点あり、いずれも直径が３～５㎝前後、重さは９～ 17ｇ前後で、江戸時代の陶磁器片の周縁を打ち欠いて作られています。

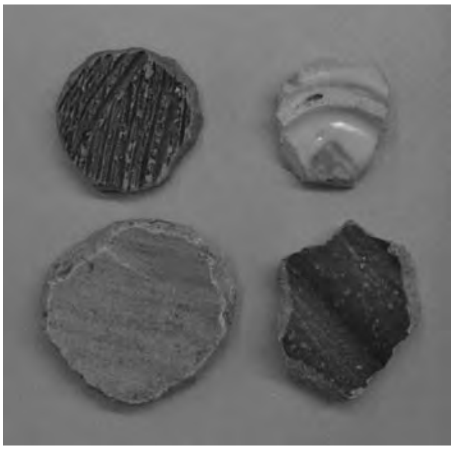
この小型円板は、一般的には中世以降になってみられるようになると考えられています。その用途については、冥銭（金銭を模した副葬品）・祭祀具・玩具（おもちゃ）・つぶて・土錘・紡錘車・灯火具など諸説があります。事例は少ないですが、油煙が付着するものも見つかっていて、灯心押さえではないかと考えられるものもありますが、今回の資料にはこの油煙は見られませんでした。

じつは、類似した資料は縄文時代にも見られます。縄文土器の破片の周縁を打ち欠いたり擦ったりして作られたもので、土製円盤と呼ばれています。その用途には、竹筒の蓋、おはじき、祭祀道具、骨角器や土器の整形具、はずみ車などの説があります。

さてこの小型円板、いったい何に使ったものなのでしょうか？なぜ畑の中から、点々と見つかったのでしょう？残念ながら今回の調査では、その用途を決定付けるような証拠は見つかっていません。

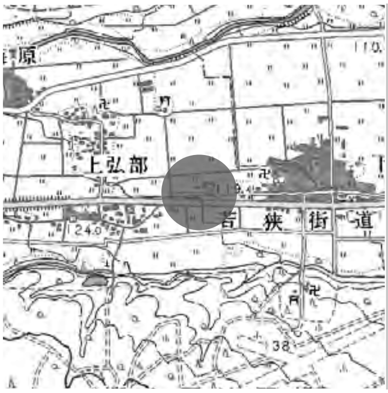
皆さんなら、この小型円板、何に使いますか？





狛氏館遺跡出土の小型円板

参考資料　縄文時代の土製円盤
（大津市滋賀里遺跡出土）



古代主要道周辺の集落 ?!

弘部野南海道遺跡（ひろべのみなみかいどう）
（高島市今津町上弘部）

弘部野南海道遺跡は、通称「若狭街道」（国道 303 号）周辺に広がる遺跡で、古墳時代～奈良時代の集落跡として知られています。若狭街道周辺には都と若狭地域を結ぶ古代の主要道があったとも推定されており、2009 年（平成 21 年）の発掘調査では道路の南側で、整然と並ぶ奈良時代～平安時代の建物など、集落跡がみつかっています。

2012 年度（平成 24 年度）には道路の北側で調査が行われ、奈良時代～平安時代の土器が出土しました（写真）。明確な遺構が検出されなかったことから、集落が若狭街道より南に広がっていたことが明らかになりました。出土した土器はこの集落で使われていたものと考えられます。

弘部野南海道遺跡から出土した土器

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ ～近江の道～ ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

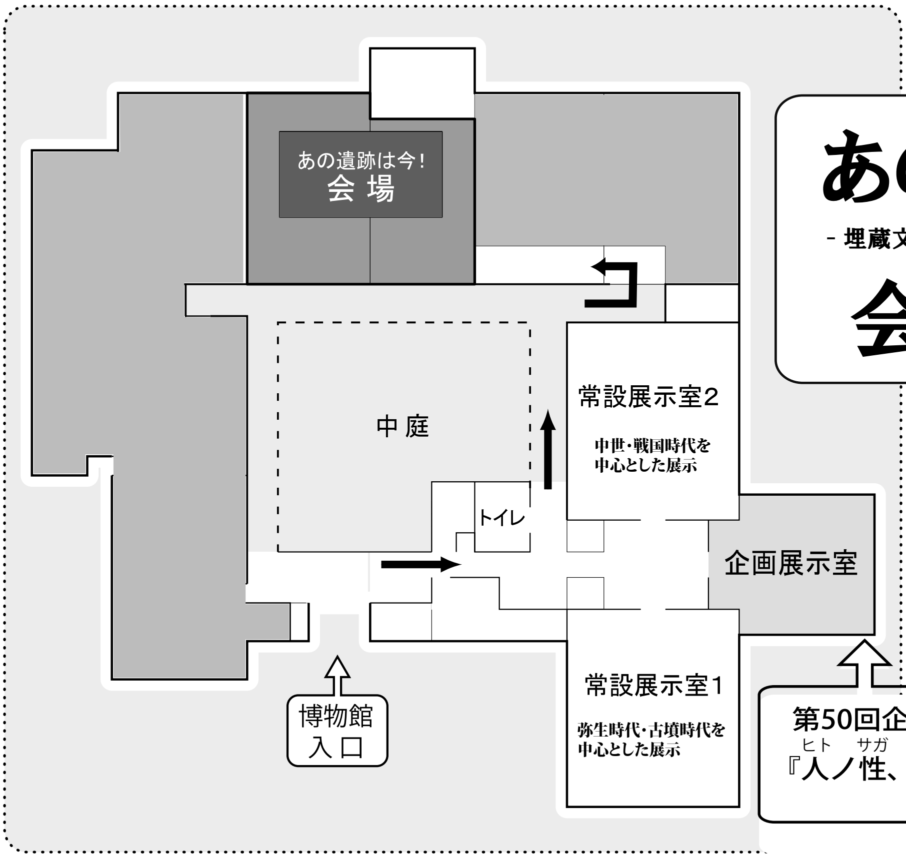
滋賀県は北を福井県、西を京都府、南を三重県、東を岐阜県に接し、いにしえより東西南北、人や物資の行き交う地です。琵琶湖と山地の間、また県内の山地間をぬって、主要道が複数走っています。交通の要衝として重要な地域であるため、”近江を制する者は天下を制す”ともいわれ、これまでに度々戦乱の舞台となりました。現代も国道や高速道路、新幹線などの幹線道が走り、その多くは古道の道筋をほぼ踏襲しているといわれていますが、詳しくみると、時期によってルートが違い、名称も異なります。

例えば、県東北部を走る国道 21 号は、江戸時代は「中山道」、それ以前は「東山道」と呼ばれており、そのルートもやや異なりました。近くの伊吹山の裾を走る国道 365 号は江戸時代には「越前路」などと呼称され、明治時代になって「北國脇往還」と呼ばれるようになります。やはりルートはやや異なります。現在高島市北域で「西近江路」「鯖街道」とも言われる国道 161 号は古代の北陸道と言われています。弘部野南海道を東西に横断する「若狭街道」と呼称される国道 303 号は江戸時代には「九里半道」「若州道九里半」などと呼ばれていました。奈良時代、平安時代はどのように呼称されていたのでしょうか？主要道はどこを通っていたのでしょうか？クニや地域の暮らしに欠かせない道、皆さんも想像してみてください。

あの遺跡は今!

- 埋蔵文化財整理調査成果報告会 - Part20

会場案内図



第50回企画展　開催中!

『人ノ性、酒ヲ嗜ム（ヒト サガ サケ タシナ）
──神を招き人を結ぶ──』

冬のイベントのご紹介

月　　日	時　　間	イベント内容		定員	場　　所
12 月 20 日（土）～ 3 月 15 日（日）	9 時 00 分～ 17 時 00 分	第 50 回企画展 『人ノ性、酒ヲ嗜ム ──神を招き人を結ぶ──』	展示		安土城考古博物館 企画展示室
2 月 15 日（日）	13 時 30 分～	テーマ展講座 「お茶の文化史」	講座	140 名	安土城考古博物館 ２Ｆセミナールーム
2 月 21 日（土）	13 時 30 分～	連続講座／戦いの文化史 「湖南・六角の山城」	講座	140 名	安土城考古博物館 ２Ｆセミナールーム
2 月 22 日（日）	13 時 30 分～	体験学習 「忍者になってみよう」	体験	20 名 要予約	安土城考古博物館 ２Ｆセミナールーム
1 月 7 日（水）～ 3 月 11 日（水）	9 時 00 分～ 17 時 00 分	テーマ展『お茶の文化史』	展示		安土城考古博物館 第１常設展示室
1 月 21 日（水）～ 3 月 18 日（水）	9 時 00 分～ 17 時 00 分	テーマ展『鯉に恋して』	展示		安土城考古博物館 第２常設展示室